



「友がみな 我よりえらく見ゆる日よ」 ～石川啄木の思いから～

標記の短歌は、「花を買い来て妻としたしむ」と続きます。

人間は、集団生活の中で他者と接し、切磋琢磨するなかで、どうしてもない劣等感を抱くものです。特に、高校生活では、自分自身のいたらなさに思いがつのり、コンプレックスと同時にむなしさを感じる。かく言う筆者も高校時代、周囲の優秀な人材と自身とをひき比べたものです。

このとき、人には抛り所となるものがあればいい。それだけでもいいと思えます。

自分の抛り所とは何か、誰か。肉親でも良い、気の置けない友人でもよい、啄木の場合、妻によりかかり、何とか精神的安定を保っているかのようです。

筆者も高校時代、父親の厳しさと優しさに触れ、それを抛り所とした時期があります。一つの言葉もそう。「おまえ、学問を軽んじるなよ。」「物事は着手すればほぼできたも同じだ。」また、「人間は有史以来、リズムを変動させて生活していない。規則的な生活を習慣づけよ。」など…

この人が父親でよかった。その子どもならと、勇気を抱いた。そんな経験もあるわけです。

現在は、筆者も啄木と同様、ちょっと切なくなるとき、帰路に立ち寄った花屋さんで、妻の大好きな花を選び取り、帰宅してそっと、妻に渡すときもあるのです。こんなときがあってもよい。少し癒され、勇気を持ってまた前へと進めるのかもしれない。

あなたにとっては、身近な誰か、それにあたるのでしょうか。

小論文ワンポイントアドバイス : 「知るということ」

ものごとを「知る」とはどういうことでしょうか。

何気なく使う「知る」とは、今まで全くしらなかったことを「知る」。いわば表層的な事象への認識であります。一方、「知る」は知るでも「熟知する」とはどういうことでしょうか。

今までわかったつもりでいたことが、実はそうではないとか、もっと深い面があることについて「知る」ことではないか。例えば、人の「死」。客観的には人の死の意味するところをわかったつもりではいる。しかしながら、身近な人の死に直面すると、人は死の意味を深く悟る。

「無常観」という言葉がある。このことは誰でも知っている、教養人の発想だ。ただ、それだけではない。日常生活の中で喪失したことへの実感が伴うこと。これがあってはじめて無常の意も汲めるということではないか。そう思います。

土曜講座の指針 : 3年生のこの時期、受験にむかう構えとして…

土曜講座は、3学年のこの時期、6月以降は全土曜日に実施する予定です。

以下に、土曜講座実施予定日を挙げています。

内容としては、国語、小論文、英語、数学等の入試対策演習(マーク対策)を予定。考査直前は◎、入試対策には数字の○印。就職試験対策は別途連絡、個別指導を行っていきます。

[土曜講座] 日程(予定)

- (国・数) 5/3(終)、◎ 5/19、① 6/2、② 6/23、◎ 6/30、③ 7/14、④ 7/21、⑤ 9/15、⑥ 9/29
- ⑦ 10/6、◎ 10/20、⑧ 10/27、⑨ 11/3、⑩ 11/17、⑪ 12/1、⑫ 12/8、⑬ 12/15、⑭ 1/12

※いずれにせよ、回数は限られています。講座の意図をくみ取り、計画的実行を!

※もちろん、夏季休業中について、別途対策あり。「夏の学習室」と銘打った対策案内は後日(連絡)要は、全体計画の把握、意図的対応、確実な実行が望まれます。健闘を祈っています。